

タイの大学のインターナショナルプログラム
ー非英語圏におけるインターナショナルプログラムの
課題と展望ー

バンコク研究連絡センター

轟 裕美

1. はじめに

我が国では 2009 年から 2013 年の間に文部科学省の補助事業として実施されたグローバル 30 を契機に同事業に採択された 13 大学を中心に英語による授業のみで学位が取得可能なインターナショナルプログラム¹が急増した。

グローバル 30 事業の総括として 2014 年 2 月 14 日に行われたシンポジウム「国際化で大学は変わったか」において文部科学省高等教育局高等教育企画課、有賀理国際企画室長はグローバル 30 実施により明らかとなった日本の大学の教育の国際化における課題を、「外的環境の変化に応じ継続的に変革できる体制」、「学内全体・学外への一層の波及」、「国際標準への適合と差別化」、および「日本人学生・留学生に提供する価値の向上」と指摘した²。

このような課題を踏まえ、また 2014 年度から始まった採択件数も実施期間もグローバル 30 よりも拡大した「スーパーグローバル大学創世支援」も後押しし、日本の大学におけるインターナショナルプログラムは内容及び制度の見直し・改善と設置数の拡大が加速していくことが予想される。

一方タイにおいては、マヒドン大学が 1986 年に国公立大学で初めてインターナショナルカレッジを設置し、インターナショナルプログラムはすでに 30 年近く実施されてきた。現在では多くの大学が学部・大学院両方で文系理系ともに幅広い分野のプログラムを提供している。

2015 年に ASEAN 経済共同体が発足し、域内の関税撤廃、サービス分野の自由化が進み、人やモノの移動が活発になるが、高等教育もこの影響を受け大学の研究者や学生の流動が活発となり、域内で快適な研究環境を提供し、また質の高い教育を提供する大学により優秀な研究者や学生が集まるようになると予測されている。これを機にタイ教育省はタイの大学が ASEAN の教育ハブとなることを目指すと宣言しており、その基盤整備として国際標準に合わせた教育制度の改変が進んでいる。

タイ教育省は 2012 年にタイの大学に対してアカデミックカレンダーを国際標準に合わせて 1 学期を 8 月から 12 月、2 学期を 1 月から 5 月とするよう求め³、2014 年より多くの大学で導入された。さらにタイ教育省は、教育の質保証、学位認定、学習成果、単位互換、学生及び教員の交流プログラムにおいて ASEAN 域内で高等教育の統一が重要だと唱えている⁴。

こうした ASEAN 域内の高等教育連携が進むにつれ、今後タイのインターナショナルプログラムは、域内の学生交流のプラットフォームとしてプログラムが発展することも推測できる。しかし、非英語圏であるタイにおいてインターナショナルプログラムを幅広く展開する上で大学は

¹ タイでは英語による授業のみで学位取得可能なコースを「インターナショナルプログラム」と呼んでおり、本稿においても日本及びタイの大学で提供される同コースは「インターナショナルプログラム」と呼ぶこととする。

² 九州大学教育国際化推進室 (2014) 「「グローバル 30 総括シンポジウム『国際化で大学は変わったか』報告書」 <http://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/follow-up/data/h26/global30_report.pdf> (2015 年 1 月 10 日アクセス) 191 ページ

³ Office of the Higher Education Commission, Thailand, Study in Thailand 2013, p.8, <<http://www.inter.mua.go.th/main2/list.php?id=pu02>>(2015 年 2 月 4 日アクセス)

⁴ Office of Higher Education Commission, Thailand, Overview of Current Thai Higher Education Development, <h

様々な課題を抱えているのではないか。

本稿では英語による授業がより難しいと考えられる学士課程に主眼をおき、タイの大学におけるインターナショナルプログラムの取り組み状況について調査を行った。第2章では調査方法と調査対象を説明する。第3章ではこの調査に基づき「組織」、「教育」、「学生」、「教職員」、「大学の国際化への影響」の5つの観点からプログラムの現状を整理し課題を考察する。第4章ではこれをふまえ、タイの事例から非英語圏におけるインターナショナルプログラムの課題と展望をまとめる。

2. 調査方法

タイのインターナショナルプログラムの実施状況を把握するために5つの大学を対象とした調査と、同プログラムで交換留学生として学ぶ日本人留学生への聞き取り調査を行った。以下に具体的な調査方法を説明する。

2.1 タイの5大学のインターナショナルプログラム調査

タイの研究9大学⁵から理工系の大学としてキングモンクット工科大学トンブリ、地方の総合大学としてコンケン大学、政治学及び法学分野を強みとするタマサート大学、タイで最初に設立された大学であるチュラロンコン大学、大学の4つの戦略の一つに国際化を掲げるマヒドン大学の5大学を選出した。それぞれの大学の概要は付録1にまとめた。

各大学の実施するインターナショナルプログラムの中から以下のプログラムを調査対象とし、大学ウェブサイトや各大学の発行する冊子などで情報収集を行いプログラムの実施概要を付録2の通りまとめた。また、プログラムの担当教職員に対して以下5項目を中心にインタビューを行い、プログラム運営の実情を調査した。インタビューの記録は付録3に添付した。

調査対象プログラム

キングモンクット工科大学トンブリ：全学の学士課程のインターナショナルプログラム

コンケン大学：インターナショナルカレッジ

タマサート大学：政治学部国際政治学科

チュラロンコン大学：コミュニケーションアーツ学部コミュニケーションマネジメント学科⁶

http://www.inter.mua.go.th/main2/page_detail.php?id=9> (2015年2月12日アクセス)

⁵ 2009年10月、タイ教育省はタイ高等教育局により選出された9つの大学を研究大学(National research universities)として定め、研究を促進するために重点的に予算を配分することとした。9つの研究大学は、国の研究を牽引すること、社会や経済の発展を後押しする国の知識基盤となること、またタイがASEAN地域の教育のハブとなることを推進する役目を負っている。9つの研究大学は、チュラロンコン大学、タマサート大学、マヒドン大学、カセサート大学、キングモンクット工科大学トンブリ、チェンマイ大学、コンケン大学、スラナリー工科大学、プリンスオブソンクラー大学。(参考：Office of Higher Education Commission, Thailand, Thai Higher Education: Policy & Issue, < http://www.inter.mua.go.th/main2/page_detail.php?id=9> p.10.(2015年2月12日アクセス)

⁶ チュラロンコン大学コミュニケーションアーツ学部コミュニケーションマネジメント学科の取り組み事例については、望月太

マヒドン大学：インターナショナルカレッジ

インタビュー項目

- 1) 組織（プログラム設立の目的、運営組織概要）
- 2) 教育（教育の目的、教育の質）
- 3) 学生・教職員（学生のリクルート及び選抜、教職員の採用）
- 4) 大学の国際化への影響
- 5) 課題

2.2 タイのインターナショナルプログラムで学ぶ日本人学生への聞き取り調査

外国人留学生にとってタイの大学のインターナショナルプログラムで学ぶ魅力を明らかにするために同プログラムで交換留学生として学ぶ3名の日本人学生に4つの観点（授業、教員・学生、タイのインターナショナルプログラムで学ぶ魅力、学習効果）について座談会形式で聞き取り調査を行った。聞き取り調査の記録は付録4として添付した。

3. インターナショナルプログラムの実施状況

第3章では、5大学の調査に基づき、「組織」、「教育」、「学生」、「教職員」、「大学の国際化への影響」の5つの観点からプログラムの実施状況を整理し各項目における課題を考察する。

3.1 組織

3.1.1 全国的な展開規模とその推移

インターナショナルプログラムはどのくらいの規模で展開されているのだろうか。表1、表2で日本とタイにおけるインターナショナルプログラムを設置する大学数とそのコース数の過去数年間の推移を示した。

郎（2011）「大学教育の国際化とインターナショナルプログラムの展望—チュラロンコン大学コミュニケーションアート学部の事例から」『KEIO SFC JOURNAL』第11巻第2号に詳しい。

日本のインターナショナルプログラム設置大学数および学部・研究科数（表 1）

年度	大学数		学部及び研究科数	
	国公立 (学部/研究科)	私立 (学部/研究科)	国公立 (学部/研究科)	私立 (学部/研究科)
2008	1 / 48	6 / 25	1 / 100	7 / 39
2009	1 / 52	7 / 29	1 / 113	8 / 42
2011	3 / 50	13 / 26	5 / 117	12 / 57
2012	8 / 52	12 / 36	16 / 127	20 / 73

出所) 文部科学省 (2014) 「大学における教育内容等の改革状況について (平成 24 年度)」 <http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1353488.htm> (2015 年 1 月 10 日アクセス) 46 ページを参考に筆者が作成。

タイのインターナショナルプログラム設置大学数およびコース数（表 2）

年	大学数		コース数		
	国公立	私立	国公立 (学士 / 修士 / 博士)	私立 (学士 / 修士 / 博士)	
2006	30	23	136 / 258 / 199	141 / 68 / 21	
2010	33	26	179 / 304 / 198	163 / 85 / 27	
2012	36	24	191 / 308 / 217	153 / 86 / 32	
2013	37	28	167 / 334 / 217	168 / 102 / 30	

出所) 以下の資料を参考に筆者が作成。

Commission on Higher Education, Thailand, *Study in Thailand 2006-2007*, p.13, pp.209-210, (タイ高等教育局より入手)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2010*, p.12, pp.225-226, (タイ高等教育局より入手)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2012*, p.13, pp.230-232, <<http://www.inter.mua.go.th/main2/list.php?id=pu02>> (2015 年 2 月 4 日アクセス)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013*, p.12, pp.277-279, <<http://www.inter.mua.go.th/main2/list.php?id=pu02>> (2015 年 2 月 4 日アクセス)

日本の大学はグローバル 30 事業の進展とともに学部レベルのインターナショナルプログラムを提供する大学が 2008 年度の 7 大学から 2012 年度には 20 大学へ急増した。学部数も 2012 年には 2008 年度の 4 倍以上の 36 コースが提供されている。同期間中に大学院では設置大学数に大きな変化はないものの、設置コース数は 60 コース近く増加しており、インターナショナルプログラムを持つ大学が提供する分野を拡大している。

タイの大学では 2006 年から 2013 年の間に設置大学数に大きな変化は見られない一方で、コース数は学部で 58、大学院で 137 コース増え、インターナショナルプログラムで学ぶことのできる分野が増加した。

2013 年のタイの大学数は国公立大学数 80、私立大学数 71 (コミュニティカレッジ除く)⁷、2012 年度の日本の大学数は国公立大学数 162、私立大学数 598 (大学院大学、短期大学、放送大学、通信制大学を除く)⁸である。すなわち、タイでは国公立大学の 46%、私立大学の 39%がインタ

⁷ Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013*, op .cit.,p.5

⁸ 文部科学省 (2014) 「大学における教育内容等の改革状況について (平成 24 年度)」前掲、8 ページ

ーナショナルプログラムを提供している。一方、日本の大学は学部レベルにおいて国公立大学で5%、私立大学の2%がインターナショナルプログラムを提供している。

3.1.2 タイにおけるインターナショナルプログラムの設立背景

このように数多くのインターナショナルプログラムがタイで設立されたのはなぜだろうか。一つの要因として、1997年の経済危機以降に子供を海外留学させる経済的余裕がなくなった家庭が増え、タイ国内で海外留学の代替となる教育を行ってほしいという社会的な需要が高まったことがある⁹。またタイには147校¹⁰のインターナショナルスクールがありここを卒業したタイ人学生の進学先にもなっている¹¹。

こうした社会背景のもと、「海外に留学し知識や技術を得て国内にそれをもち帰るといった知識の輸入型」¹²から、「海外から人材を受け入れてそこでタイ人が学ぶ仕組み」¹³が整備されてきた。このようにタイのインターナショナルプログラムは、タイ人学生が海外留学で得られる知識や英語力、国際感覚等を国内で習得するために設立されてきた。

3.1.3 インターナショナルプログラムの3種類の運営方式

インターナショナルプログラムの運営方式は大きく分類すると3種類あり、1) 大学で開講する全ての授業を英語で行う方式、2) インターナショナルカレッジという大学から独立した学部横断的な組織の中で運営する方式、3) 各学部が独自に運営する方式である。

1) の方式は私立大学であるアサンプション大学で行われている¹⁴。

調査を行った5大学のうち、キングモンクット工科大学トンブリとチュラロンコン大学は3)の方式で、これらの大学は各学部の自治が強い傾向にあるため学部が学生の入試から教員の採用、教育カリキュラムや教育の質の管理を独自に行っている¹⁵。

タマサート大学も3)の方式だが、各学部のインターナショナルプログラムに所属する学生は低年次の一般教養科目をインターナショナルカレッジで履修する¹⁶。

コンケン大学とマヒドン大学は2)と3)両方を採用し、インターナショナルカレッジと学部がそれぞれインターナショナルプログラムを運営している。コンケン大学では学部のインターナショナルプログラムに所属する学生も低年次の一般教養科目はカレッジで開講される授業を履修する¹⁷。大学から独立したカレッジの利点は、大学本体の規則に縛られずに外国人およびタイ人教

⁹ 付録 3.3.1 参照。

¹⁰ Pichitarn, Parisa (2015, February 25). A World of Educational Opportunity. *Bangkok Post*, p.12.

同記事によると、タイのインターナショナルスクールは1992年に国際化の高まりから当時のAnand Panyarachun 首相がインターナショナルスクールをタイ人学生に対しても門戸を開くべきだと提言したことによりその数が急増した。

¹¹ 付録 3.2.3、3.4.1 参照。

¹² 付録 3.4.1 参照。

¹³ 付録 3.4.1 参照。

¹⁴ Assumption University, President's Welcome, <<http://www.au.edu/index.php/president-s-welcome>> (2015年2月20日アクセス)

¹⁵ キングモンクット工科大学トンブリについては付録 3.1.1、チュラロンコン大学については付録 3.4.1 参照。

¹⁶ 付録 1 参照。

¹⁷ 付録 1 参照。

員の給与設定や雇用を行うことができ、現状に合わせた柔軟な組織運営ができることである¹⁸。また、各学部でインターナショナルプログラムを運営する3大学の外国人教員の割合は5%から33%¹⁹であるのに対して、コンケン大学とマヒドン大学のインターナショナルカレッジでは50%以上²⁰であることを考慮すると、カレッジでは外国人教員が集約されより多様な文化的背景を持つ教員による授業を学生に提供しているようである。

一方、学部による運営ではタイ語コースの学生とインターナショナルプログラムに所属する学生や教員が相互に交流できることが利点である²¹。また、専門科目の教育の質管理についても「各学部所属する教員が教授内容やコースの連続性、ティーチングスケジュールを把握しているため、運営効率がよく、教育の質も保証できる」²²という利点がある。

3.1.4 国際的な共同教育プログラムとの連動

タイのインターナショナルプログラムは第3章1節2項で述べたとおり、タイ人学生の教育を目的として設立されてきたが、近年同プログラムは国際的な共同教育プログラムと連動し海外からの学生の受け入れ・派遣のプラットフォームとして機能している。

タイ高等教育局も、タイの大学の学位が国際的に認められ、プログラムと教員の質の向上のために海外の多くの一流大学と緊密に連携することを強く推奨している²³。

AIMSプログラムとの連動もその一つである。マヒドン大学はAIMSプログラムにおいて「国際ビジネス」を交流分野としており、同プログラムのもと受け入れる学生はインターナショナルカレッジ国際ビジネス学科で受け入れている²⁴。また、キングモンクット工科大学トンブリ工学部は、工学分野で長年、多くのインターナショナルプログラムを実施してきた実績により、タイ高等教育局よりAIMSプログラムの「工学」分野の受け入れ先として選ばれている²⁵。

さらに海外の大学とのダブルディグリーやジョイントディグリープログラムの一部としても活用されており、キングモンクット工科大学トンブリ工学部においては、土木工学科がオーストラリアのタスマニア大学と、情報工学科がアメリカのミズーリ大学コロンビア校とツイニングプログラムを行っている。1、2年時をタイ、3、4年時を提携校で学び、最終的に両方の大学から学位を取得するダブルディグリープログラムである²⁶。

このように既存のプログラムを活用して国際的な共同教育プログラムに参加することで、組織に大きな負担をかけずに大学の教育を効率的に国際化することができているのではないだろうか。

¹⁸ 付録 3.2.1、3.5.1 参照。

¹⁹ 付録 2.1、2.3、2.4 参照。

²⁰ 付録 2.2、2.5 参照。

²¹ 付録 3.1.1、3.4.1 参照。

²² 付録 3.3.2 参照。

²³ Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013*, op .cit.,p.6

²⁴ 日本学術振興会 (2013)「AIMS リスト掲載大学 (2013 年 6 月 13 日現在)」<http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/download/11_tenkaih25_aimslist_130613ver.pdf> (2015 年 2 月 7 日アクセス) および Mahidol University International College, Worada Aprirat 短期交流プログラム担当職員より聴取 (2015 年 1 月 15 日)。

²⁵ 付録 3.1.1 参照。

²⁶ 付録 3.1.1 参照。

3.2 教育

3.2.1 教育の目的

インターナショナルプログラムとタイ語コースの教育目的は、一般的に前者は一般教養および就職後に役立つ実務教育、後者は学術的な専門知識の習得に重きが置かれているようである。チュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科へのインタビューによると、一般的なタイ語コースでは卒業論文が課されているが、同プログラムでは企業へのインターンシップや海外留学などが推奨されている²⁷。

第3章1節2項で述べたように、海外留学の代替として海外の大学に近い教育を提供するプログラムもある。タマサート大学国際政治学科のインターナショナルプログラムでは「人権や国際開発、紛争解決、トランスナショナリズムなどの世界の抱える課題や議論点」がテーマとして設定されているのに対して、タイ語コースでは「タイの外交政策、主要国及び近隣諸国の外交政策とその背景」に焦点を当てている²⁸。前者の卒業生は国際機関や海外の大学院への進学、後者はタイの外務省への就職を目指す傾向があり、教育目的の違いはキャリアにも反映されている²⁹。また、マヒドン大学インターナショナルカレッジではアメリカの大学のリベラルアーツ教育をタイで行うことを目的にカレッジが設立された経緯がある³⁰。

3.2.2 教育の質保証

教育の質保証については、多くの大学で内部あるいは外部によるプログラムの評価が行われている。キングモンクット工科大学トンプリでは、タイ語コースもインターナショナルプログラムも全てのプログラムでAUN-QAプログラムアセスメント(AUN Actual Quality Assessment)³¹を受審し認可を得ることを目指しており、国際基準での教育の質保証も試み始められている³²。評価制度だけでなく、タマサート大学の学士課程では最低5名の常勤のタイ人教員がプログラムの運営や教育内容を管轄することが義務付けられ、これにより教育の質保証を行っている³³。

²⁷ 付録 3.4.2 参照。

²⁸ 付録 3.3.2 参照。

²⁹ 付録 3.3.2 参照。

³⁰ 付録 3.5.1 参照。

³¹ AUN-QA プログラムアセスメント (AUN Actual Quality Assessment) : AUN 加盟大学及び非加盟大学の教育をプログラムレベルまたは機関レベルで評価する ASEAN 域内の高等教育機関の質保証の取り組み。アセスメントを受審し、AUN の定める教育の質の基準を満たしていると評価されると、AUN から質保証のサーティフィケートが付与される。
参考：大学評価・学位授与機構評価事業部国際課 (2014) 「AUN 加盟大学に対するプログラムアセスメントについて」 <http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/qa/no17_aun_programassess.pdf> (2015 年 2 月 3 日アクセス) および ASEAN University Network, AUN-QA Actual Quality Assessment at Program Level, <<http://www.aunsec.org/programmelevel.php>> (2 月 3 日アクセス)

³² 付録 3.1.2 参照。

³³ 付録 3.3.2、3.3.3 参照。

3.3 学生

3.3.1 タイ人学生

タイ人学生にとってインターナショナルプログラムがタイ語コースと大きく異なるのは、選抜制度と学費である。

タイ語コースではアドミッションとクリアリングハウスと呼ばれる 2 種類の入試制度³⁴があり、入学するためにはどちらかを受験し合格しなければならない。アドミッション方式ではGAT-PAT（一般適正テストと専門学術適正テスト（数学、科学、工学、建築、教育、芸術、言語の中で受験を希望する学部によって 1 から 2 科目選択して受験する）、O-Net（一般教養テスト、タイ語、社会、英語、数学、科学、芸術、テクノロジーの基礎学力を問う）、GPAX（高校 3 年間の成績）がそれぞれ点数配分され合否が決まる。クリアリングハウス方式は、日本のセンター試験のように 7 科目（タイ語、社会、英語、数学、科学、生物、物理）の統一試験の点数と大学によっては GAT-PAT の点数を加味して合否が決まる。どちらの選抜制度でも、幅広い試験科目の勉強と高校 3 年間の継続的な学習が求められる。

一方インターナショナルプログラムでは、一般的に TOEFL や IELTS などの英語能力テストの点数とプログラムで実施される筆記試験及び面接で選抜試験が構成されている。

例えばマヒドン大学インターナショナルカレッジの場合は、カレッジ独自の英語と数学、また学科によっては専門科目に関する試験が行われる。筆記試験合格後に面接試験が行われ、最終的な合否が決定する³⁵。英語力については多くの大学が TOEFL iBT60 以上を設定しているが、マヒドン大学インターナショナルカレッジでは iBT79 以上が求められる。

学費については、同じ学科でもインターナショナルプログラムはタイ語コースよりも高く設定されている。例えばキングモンクット工科大学トンブリ工学部土木工学科では、1 学期の登録料がタイ語コース 12,000 バーツに対してインターナショナルプログラムは 25,000 バーツ、受講料は 1 単位当たりそれぞれ 500 バーツ、1,500 バーツ、入学料はそれぞれ 12,000 バーツ、25,000 バーツと大きな開きがある³⁶。

学費にこれほど大きな差があるにもかかわらず、調査からは多くの大学で学生のリクルートに苦勞していないという回答が得られた。入学条件として高い英語力は求められるが、タイ語コースのように幅広い科目を受験せずとも有名大学に入学でき、さらに実社会で役立つ知識と技能を教育目的としているため、よい就職が望めることも学生をひきつける要因ではないかと推察する。

しかしキングモンクット工科大学トンブリ、タマサート大学国際政治学科、チュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科へのインタビューでは、大学側はインターナショナルプログラムの質の向上のためにより優秀な学生を確保することが課題だと認識していた³⁷。

³⁴ タイの大学の入試制度は毎年変更されており、本稿に記載したのは 2015 年 2 月現在の制度。日本学生支援機構タイ事務所、Monthira Jungpanit エデュケーションショナルアドバイザー、Nuntaporn Chuenkrathok エデュケーションショナルアドバイザーより聴取（2015 年 2 月 10 日）。

³⁵ Mahidol University International College, ADMISSIONS REQUIREMENTS, <http://www.muic.mahidol.ac.th/eng/?page_id=2138>（2015 年 2 月 7 日アクセス）

³⁶ King Mongkut's University of Technology Thonburi, Faculty of Engineering, Tuition fee, <<http://www.eng.kmutt.ac.th/en/node/74>>（2015 年 2 月 7 日アクセス）

³⁷ 付録 3.1.5、3.3.5、3.4.3 参照。

3.3.2 外国人留学生

調査を行った 5 大学のインターナショナルプログラムでは、外国人留学生の割合は全体の 1 割以下であった³⁸。インタビュー調査によると外国人留学生獲得については、近隣諸国でプロモーション活動を行っている大学もある³⁹ものの、海外提携大学やAIMSプログラムで短期留学生を受け入れる以上には積極的に獲得を目指していないようである。

多くの留学生を獲得することよりもむしろ、少数ではあるが外国人留学生の存在がタイ人学生に対して異文化交流や英語でのコミュニケーションの必要性をもたらす重要な教育資源と認識されているようである。キングモンクット工科大学トンプリはインタビューで「留学生がいることは大学にとって大きなメリットだ」と述べている⁴⁰。

このようにタイのインターナショナルプログラムは、タイ人学生に対する教育効果を強く意識して設計されているが、外国人留学生にとってはどのような魅力があるのだろうか。タイのインターナショナルプログラムで学ぶ日本人留学生への聞き取り調査から、同プログラムで外国人留学生が学ぶ魅力を以下の通り 3 点にまとめた⁴¹。

第 1 に、インターナショナルプログラムに所属する学生の 9 割がタイ人学生であるため、授業や学生生活の中でタイ人学生とコミュニケーションをとる機会が多く、タイ語の習得やタイ文化・社会の理解に繋がるほか、タイ語という言葉の壁により、学生がコミュニケーション力や人間関係構築を学ぶよい機会となっている。

第 2 に、タイ人学生の英語力向上を教育目的の一つとしているため、英語の授業以外でもエッセイやプレゼンテーションなどを通して英語力を伸長するための工夫がされており、非英語圏から来た留学生にとっては英語力向上につながる。欧米の大学への留学と比較して授業料も生活費も安いタイで、英語を学ぶことができることも大きな魅力のようである。

第 3 に東南アジアという地理的特徴や社会的背景を生かした授業が、日本の大学とは異なる知識の習得や、分析する視点の違いに反映されており留学生にとって興味深い内容となっている。

一方で教育の質について課題も指摘されている。「論文にできるような新しい専門的な知識を得ることはできなかった」⁴²というコメントもあり、新たな知識の獲得や研究課題の発見につながる内容が授業で十分に提供されていない場合もあるようだ。これはインターナショナルプログラムがタイ人学生の幅広い一般教養や実社会で役立つ知識の習得を教育目的としており、日本の大学のように学生の研究を目的として設計されていないことも一因であるだろう。

タイの大学のインターナショナルプログラムは、現在は所属学生のほとんどがタイ人であるため、タイ人学生やタイ社会の需要に応える教育の提供に重きが置かれ、1 年以内の短期留学生への教育をどのように行うかという点についてはあまり考慮されていない可能性がある。しかし、タイの社会的需要に後押しされて設立されたインターナショナルプログラムは、現在では第 3 章 1 節 4 項で述べた通り、海外大学の教育プログラムと連動し学生の受け入れと派遣の基盤として機能するようになった。今後は留学生の学習需要も満たす教育カリキュラムと質を考慮していく

³⁸ 付録 2

³⁹ 付録 3.1.3、付録 3.2.3 参照。

⁴⁰ 付録 3.1.4 参照。

⁴¹ 聞き取り調査の記録全文は付録 4 参照。

⁴² 付録 4.1

必要があるのではないだろうか。

3.4 教職員

3.4.1 教職員の採用

タイ人教員については、英語で授業を行うことのできる人材のリクルートにどの大学も苦勞しておらず、タイでは海外の大学で学位を取得した教員が多いためだろう。

外国人教員については多くの大学がリクルートに難しさを感じているようである。外国人教員の割合はキングモンクット工科大学トンプリが最も低く 5%⁴³で、研究も行うことのできる科学技術分野の外国人教員の採用がより難しいようである⁴⁴。チュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科およびタマサート大学国際政治学科ではおよそ 30%前後の外国人教員がいるが⁴⁵、適切なアカデミックバックグラウンドをもった人材のリクルートが難しく、母国と同程度の給与を支払うことができないことが大きな要因である。

しかしチュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科では、毎年 8 名ほどの外国人教員を招聘しサマーセメスター等に集中講義を行っており⁴⁶、これにより適切な外国人教員の不足を補うことができているのではないだろうか。

マヒドン大学インターナショナルカレッジおよびコンケン大学インターナショナルカレッジでは外国人教員の割合は 50%以上で⁴⁷、カレッジでは柔軟な規則に基づき外国人教員を採用できること、一般教養科目を担当する教員は専門科目よりも比較的探しやすいことが要因ではないだろうか。しかしコンケン大学インターナショナルカレッジにおいても、外国人教員の質が課題として指摘された⁴⁸。

事務職員については、インターナショナルカレッジにおいて特に英語が流暢で優秀な人材を採用しようとする傾向がみられる。コンケン大学インターナショナルカレッジでは給与を学部所属の職員の 1.8 倍に設定し、英語が流暢な人材を採用している⁴⁹。マヒドン大学インターナショナルカレッジでは事務職員のうち 6%が外国人職員で構成されている⁵⁰。これらのカレッジではインタビューで訪れた際にも、事務職員もカレッジの理念や教育方針を説明することができプログラムの運営に積極的に参加しているという印象を受けた。カレッジでは国際的な環境をつくる重要な構成員として事務職員も位置づけているのではないだろうか。

⁴³ 付録 2.1 参照。

⁴⁴ 付録 3.1.3 参照。

⁴⁵ 付録 2 参照。

⁴⁶ 付録 2.4 参照。

⁴⁷ 付録 2.1 参照。

⁴⁸ 付録 3.2.5 参照。

⁴⁹ 付録 3.2.3 参照。

⁵⁰ 付録 2.5 参照。事務職員数には準備課程の教員も含まれる。

3.4.2 教員の研究への従事

近年、タイ教育省は国の国際競争力を上げるために大学に研究に力を入れるよう求めており、「第2次長期高等教育計画（2008-2022）」の中で挙げられた9つの課題の一つに、研究を基礎として大学が国の競争力を牽引する役割を果たすことが含まれている⁵¹。

これを受けて特に研究9大学では、これまで教育を中心に行ってきた国際プログラムにも研究実績を求めるようになった。この対策としてマヒドン大学国際カレッジやチュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科では、研究と教育担当に教員を分けて採用し⁵²教員個人レベルではなく、組織レベルで研究実績を上げる制度をつくっている。授業担当として採用した教員が急に研究を行うことは難しいため、このような措置をとっているとのことである⁵³。しかしこの制度では、組織として研究は行っているが、教員の研究成果が学生の教育に反映されにくいことが懸念される。

タイの大学は当初、研究ではなく知識を教授し優秀な官僚を育成するための機関として設立された⁵⁴。その後1960年代に地方に総合大学が設立され、すでに設立されていたチュラロンコン大学、マヒドン大学、タマサート大学等も総合大学へと拡大し、総合大学の役割として研究を行うことが求められるようになった⁵⁵。しかし現在でも、タイの大学では研究は高等教育の中に根付いておらず、教員は知識を西欧諸国から取り入れることに頼っていると指摘されている⁵⁶。タイの大学に研究が根付くためには、研究と教育の結びつきが確立されなければならない、研究を基礎とした教育を行うことで、学生に対して新たな知識をどのように生み出していくかを教えることができるだろうとSinlaratは述べている⁵⁷。

この指摘のように、教員一人一人が積極的に研究を行うことで教育の質の向上を図ろうとする大学もあり、コンケン大学国際カレッジでは研究費や学会参加経費の補助などのインセンティブを設け、教員に研究を行うことを推奨している⁵⁸。チュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科も、プログラムの教育の質向上のために教員が研究に力を入れるべきだと指摘した⁵⁹。

プログラムの求める資質を備えた外国人教員の獲得と、教員が研究に従事しその内容が教育に反映されるようになることが、国際プログラムにおける教員面での課題であり、これはプログラムの教育の質の向上にも深く関わっている。

⁵¹ Office of Higher Education Commission, Thailand, Thai Higher Education: Policy & Issue, op. cit., p.4.

⁵² 付録 3.4.5、3.5.5 参照。

⁵³ 付録 3.5.5 参照。

⁵⁴ Sinlarat, Paitoon (2004), "Thai Universities – Past, Present, and Future," in Philip G. Altbach and Toru Umakoshi, eds., *Asian Universities: historical perspectives and contemporary challenges*, The Johns Hopkins University Press, p.205.

⁵⁵ Ibid., p.208.

⁵⁶ Ibid., p. 212.

⁵⁷ Ibid., pp. 216-217.

⁵⁸ 付録 3.2.2 参照。

⁵⁹ 付録 3.4.5 参照。

3.5 大学の国際化への影響

インターナショナルプログラムの学内における規模を把握するために、付録 1 で全学生数に対するインターナショナルプログラムに所属する学生数の割合を示した。マヒドン大学では全学生の 24%、他の 4 大学では 10%前後の割合であった⁶⁰。

各大学がインタビューで指摘した大学の国際化への影響は、間接的な効果にとどまるものが多かった。コンケン大学インターナショナルカレッジは、カレッジの教職員が他学部の国際業務を支援していること⁶¹、タマサート大学国際政治学科はプログラムの独自性による価値⁶²、チュラロンコン大学コミュニケーションマネジメント学科は、高い学費が学部の重要な収入源となっていること⁶³、マヒドン大学インターナショナルカレッジは、外国人教員や留学生の受け入れにより世界大学ランキングにおける国際化指数を高め、ランキング上昇につながることもおよび、カレッジが学内の組織の国際化のモデルとなっていることを挙げた⁶⁴。

インターナショナルカレッジの場合は、カレッジに留学生や外国人教員を集めて国際的な環境をつくっているため、カレッジ外への国際化の波及効果は限定的かもしれない。

しかし、キングモンクット工科大学トンブリは大学全体への教育効果を挙げ、留学生により文化的多様性や英語でのコミュニケーションの必要性が学内にもたらされ、タイ人学生や教員にとって国際感覚や英語力を身に着けるための環境が整うことが指摘された⁶⁵。同大学は学生数も教員数も他の 4 大学と比較して小規模であり、プログラムの取り組みが学内全体に波及しやすいことも要因だろう。また、外国人教員は所属学部のタイ語コースとインターナショナルプログラムコースの両方で授業を行っており⁶⁶、教育内容に大きな区別をつけていないことから、両コースを隔てる壁が低いことも影響しているのではないだろうか。

同大学はプログラムの課題を「大学関係者全てにインターナショナルプログラムが大学全体にとって価値があることを共通認識させること」⁶⁷と指摘し、大学全体への国際化の波及がプログラムの存続と発展に欠かせないと認識している。

タイでは日本よりも長い間インターナショナルプログラムが実施されてきたが、プログラムのもたらす国際的な要素を学内全体へ波及させることは多くの大学であまり認識されていない。しかしキングモンクット工科大学トンブリの指摘の通り、留学生はタイ人学生や教員にとって重要な教育資源であり、今後同プログラムが大学の教育の国際化へ果たす役割が見直されていく可能性がある。

⁶⁰ 付録 1 参照。

⁶¹ 付録 3.2.4 参照。

⁶² 付録 3.3.4 参照。

⁶³ 付録 3.4.4 参照。

⁶⁴ 付録 3.5.4 参照。

⁶⁵ 付録 3.1.4 参照。

⁶⁶ 付録 3.1.2 参照。

⁶⁷ 付録 3.1.5 参照。

4. 非英語圏における国際化プログラムの課題と展望

非英語圏の大学における国際化プログラムはどのような課題を抱え、教育や学術の国際化が進む中で今後どのような展望が望めるだろうか。本稿ではその一例としてタイの大学の取り組みを調査し課題を考察した。

タイの大学における国際化プログラムの課題は大きく2つあり、1つ目は教育の質の向上である。そのために優秀な学生の獲得、プログラムに適切なアカデミックバックグラウンドを持つ外国人教員の獲得、また教員が研究に従事しそれを教育に反映させることが必要である。2つ目は大学全体への国際化の波及効果であり、ランキングの国際化指数の上昇だけにとどまらず、プログラムで受け入れる国際色豊かな教員や学生がもたらす研究や教育への効果を全学の教員や学生が享受できることが重要ではないだろうか。

今後タイの大学は、国際化プログラムを基盤として国際的な共同教育プログラムへの参加や海外提携校との学生や教員の交流をさらに進めていこう。タイの国際化プログラムは、所属する学生の9割がタイ人学生であるため、外国人留学生にとってはタイ語やタイ文化・社会に触れることができ、タイ人学生にとっては外国人留学生の存在により国際交流や英語でのコミュニケーションの機会があり、相互に学習機会が生み出されている。これはタイの国際化プログラムが両方の学生を惹きつける一つの魅力である。

留学生受け入れや海外大学との共同教育プログラムが増えると、そこで提供される教育の質は留学生やパートナー大学からも評価されるようになるだろう。このため、タイ国内の需要だけでなく留学生や海外の提携大学からの需要にも応える教育内容と質の向上がより一層求められるようになるだろう。タイの大学における国際化プログラムは、このような国際的な共同教育プログラムとの関わりの中で教育の質が向上していくことが期待される。

タイの大学の事例を非英語圏における国際化プログラムの課題として一般化することは非常に難しいが、上述した課題と展望から日本の大学の国際化プログラムにも共通する課題を2点引き出すことができるだろう。

国際化プログラムによって学内にもたらされる国際的な学生や教員が、日本人学生の学びに大きな役割を果たすことが、同プログラムが日本に根付き持続発展していく鍵となるだろう。またプログラムが日本国内だけで実施されるのではなく、様々な国際的な共同教育プログラムと接続することで、海外の留学生やパートナー大学からの意見や評価を取り入れながら教育の質を継続的に向上させていくことができるのではないだろうか。

謝辞

快くインタビュー及び調査に応じて頂いたキングモンクット工科大学トンブリ、コンケン大学インターナショナルカレッジ、タマサート大学政治学部国際政治学科、チュラロンコン大学コミュニケーションアート学部コミュニケーションマネジメント学科、マヒドン大学インターナショナルカレッジの皆様にご心よりお礼を申し上げます。

また、鹿児島大学・小森健太さん、九州大学・張田あずささん、京都大学・楊木萌さんには座談会でタイでの留学経験について学生の視点からお話を伺うことができ、大学職員としてとても勉強になりました。本当にありがとうございました。

本稿作成にあたり多くの助言をいただきました、大阪大学 ASEAN センター・望月太郎センター長、キングモンクット工科大学トンブリ・関達治研究顧問、在タイ日本国大使館・俵幸嗣一等書記官、チュラロンコン大学教育学部 ESD 教育開発センター・Athapol Anunthavorasakul ディレクター、東京農工大学・河井栄一教授、日本学生支援機構バンコク事務所・Monthira Jungpanit エデュケーショナルアドバイザー、Nuntaporn Chuenkrathok エデュケーショナルアドバイザー、日本学生支援機構留学生事業部・山本剛専門職員、日本学術振興会バンコク研究連絡センター・山下邦明センター長、山田大輔副センター長、Natthida Veeramongkornkun リエゾンオフィサーに感謝いたします。

1 年間のバンコクでの国際協力員としての研修は学びに満ち、大学職員としての幅を広げられました。関係者の皆様に重ねてお礼申し上げます。

付録 1：調査を行った 5 大学の概要

大学		キングモンクット工科大学 トンプリ	コンケン大学	タマサート大学	チュラロンコン大学	マヒドン大学
設立年		1986 年 (注 1)	1966 年	1934 年	1917 年	1943 年 (注 2)
区分		独立法人	国立	国立	独立法人	独立法人
学生数	学部	11,686	30,197	26,073	25,135	18,907
	大学院	5,961	9,961	4,375	13,655	6,456
QS アジア大学 ランキング 2014		181~190 位	171~180 位	134 位	48 位	40 位
インターナショナルプログラム 運営組織		各学部	インターナショナルカレッジと各学部	各学部 (1年次の一般教養の授業はインターナショナルカレッジで全学的に行う。)	各学部	インターナショナルカレッジと各学部
インターナショナルプログラム設置数	学士	11	9	24	13	26
	修士	12	12	17	38	79
	博士	7	11	6	22	56
	ディプロマ等	-	1	1	2	5
インターナショナルプログラム所属 学生数 (全学生数に占める割合)		2,312 (13%)	6,779 (16%)	2,378 (8%)	4,650 (12%)	6,101 (24%)

(注 1) 独立法人化し大学として認可された年。前身のトンプリ技術学校は 1960 年に設立。

(注 2) 医科大学としての創立年。のちに総合大学となった。

出所) 以下の資料を参考に筆者が作成

設立年、学生数、インターナショナルプログラム所属学生数：パーソネルコンサルタントマンパワー（タイランド）株式会社（2014）「タイの大学事情」

キングモンクット工科大学トンプリのインターナショナルプログラム所属学生数：同大学より聴取。

コンケン大学のインターナショナルプログラム所属学生数：Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013*, op .cit.p.54

区分、インターナショナルプログラム設置数：Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013*, op .cit.

QS アジア大学ランキング 2014：QS Quacquarelli Symonds Limited, QS University Rankings: Asia 2014, (2015)< <http://www.topuniversities.com/university-rankings/asian-university-rankings/2014>>(2015年2月4日アクセス)

インターナショナルプログラム運営組織：各大学へのインタビューの際に聴取。

付録 2 : 5 大学の調査対象プログラムとその概要

2.1 キングモンクット工科大学トンブリ

調査対象	大学全体の学士課程のインターナショナルプログラム		
設置コース	学士（建築学）2 コース、学士（美術）2 コース、学士（工学）6 コース、学士（理学）1 コース		
所属学生数	タイ人	1,905	外国人学生の割合
	外国人	110	5%
教員数	タイ人	570	外国人教員の割合
	外国人	31	5%

出所) King Mongkut's University of Technology Thonburi, *Strive for Practical Excellence* を参照し筆者が作成。
学生数、教員数は同大学より聴取。

2.2 コンケン大学

調査対象	インターナショナルカレッジ		
設置コース	学士（文学）2 コース、学士（理学）1 コース、学士（経営学）2 コース		
所属学生数	タイ人	488	外国人学生の割合
	外国人	53	10%
教員数	タイ人	11	外国人教員の割合
	外国人	16	59%

出所) Khon Kaen University International College, *KKUIC Annual Report 2013* を参照し筆者が作成。

2.3 タマサート大学

調査対象	政治学部国際政治学科（学士・修士一貫コース）		
設置コース	学士（政治学）コースと修士（政治学）コース		
所属学生数（※）	タイ人	359	外国人学生の割合
	外国人	27	7%
教員数	タイ人	15	外国人教員の割合
	外国人	7	32%

※学士課程のみ

出所) タマサート大学政治学部国際政治学科より聴取（2015年2月13日）し筆者が作成。

2.4 チュラロンコン大学

調査対象	コミュニケーションアート学部コミュニケーションマネジメント学科		
設置コース	学士（コミュニケーションマネジメント）（Bachelor of Arts in Communication Management）		
所属学生数	タイ人	374	外国人学生の割合
	外国人	11	3%
教員数 （※）	タイ人	12	外国人教員の割合
	外国人	6	33%

※このほかサマーセメスター等に集中講義のために毎年8名ほどの外国人教員が招聘されている。

出所) Chulalongcorn University, Communication Management, <<http://www.inter.commarts.chula.ac.th/pa>> (2015年1月11日アクセス) および同学科より聴取 (2015年1月21日) し筆者が作成。

2.5 マヒドン大学

調査対象	インターナショナルカレッジ		
設置コース	学士（文学）6コース、学士（理学）7コース、学士（工学）1コース、学士（経営学）6コース、修士（経営学）1コース、修士（観光学）1コース		
所属学生数	タイ人	3,384	外国人学生の割合
	外国人	231	6%
教員数	タイ人	65	外国人教員の割合
	外国人	66	50%
職員数 （準備課程の教員含む）	タイ人	262	外国人職員の割合
	外国人	17	6%

出所) 設置コース：Office of Higher Education, Thailand, *Study in Thailand 2013*, op .cit., pp. 92-103 (2015年1月16日アクセス)、学生数及び教職員数はマヒドン大学インターナショナルカレッジより聴取 (2014年12月11日)。

付録3：5 大学のインターナショナルプログラムについてインタビュー

3.1 キングモンクット工科大学トンプリ

教育担当副学長 Bundit Thipakorn 准教授、学務担当副学長 Chaowalit Limmaneevichitr 准教授、入試部門ディレクターDr. Ariya Brahasubha、関連治学術顧問にインタビューを行った (2015年1月28日)。

3.1.1 組織

(設立の目的)

建築デザイン学科が1994年に設置されたとき、これまでとは違う新たな魅力あるコースにするために学科の授業を全て英語により授業を行うインターナショナルプログラムとして開講する

ことにした。

このほか特徴的なインターナショナルプログラムは、土木工学科がオーストラリアのタスマニア大学と、情報工学科がアメリカのミズーリ大学コロンビア校とツイニングプログラムを行っている。1、2年時をキングモンクット工科大学トンブリで学び、3、4年時を提携校で学び両方の大学から学位を取得するダブルディグリープログラムである⁶⁸。

もともとインターナショナルプログラムはタイ人学生のために設立されたものだが、AIMSプログラムが始まり高等教育局よりAIMSプログラムの工学分野の受け入れ先として、すでに同分野で多くのインターナショナルプログラムを開講していた本学が選ばれた。外国人留学生の受け入れは、本学のタイ人学生にとって、英語力向上につながるというメリットがある。

(運営組織概要)

インターナショナルカレッジを持たないため、完全に英語だけの環境を作ることができないことがデメリットではあるが、外国人留学生にとってはタイ語やタイ文化に触れる機会が多く、これはメリットといえるだろう。

建築デザイン学科では全ての授業が英語で行われているため、インターナショナルカレッジに近い環境といえるかもしれない。学部横断的なインターナショナルカレッジに統合することは、各学部の自治の観点から難しいだろう。

外国人留学生へのサポートやタイ人学生の留学支援は中央の事務局で一元的に行っており、インターナショナルカレッジのような機能は学内に存在している。現在、「インターナショナル commons」という、全てを英語化した生活環境スペースを作ることも検討している。外国人留学生はタイに慣れるまでの間、英語ですべて生活でき、タイ人学生もその空間で英語だけの環境に身を置くことができるスペースの構想である。

また、現在は短期留学生や交換留学生のためにカスタマイズされたプログラムはないが、将来的には作りたいと考えている。欧米からの留学生のほとんどは、科学技術を学ぶためではなく、タイの文化や伝統の経験とタイ語を学ぶために来ている。そのため、文化体験プログラムの中にタイ特有の科学技術の要素を盛り込んだプログラムを作りたい。留学生にとっては、将来タイで働く場合に、タイ語やタイ文化を理解していることは役に立つだろう。

3.1.2 教育

(教育の目的)

インターナショナルプログラムでは、学生が卒業後に世界のどこでも働けるように仕事で役に立つ実用的な技能を取得し、国際競争力と英語力を習得することを目的としている。卒業後はタイに支社を置く国際的な企業に就職することが多い。

タイ語コースとインターナショナルプログラムの授業の中身はほぼ同じで、使用言語が英語かタイ語かという違いのみである。タイ語コースでも英語のテキストを使うことを推奨しているほ

⁶⁸ King Mongkut's University of Technology Thonburi, *Strive for Practical Excellence*, p.25、および副学長から聴取（2015年1月28日）

か、3、4年次の試験の80%は英語で行われている。外国人教員もタイ人教員も基本的に、所属学部でインターナショナルプログラムとタイ語プログラムの両方で授業を行う。

(教育の質)

教育の質向上のためにタイ語コースもインターナショナルプログラムも全てのプログラムでAUN-QAプログラムアセスメント(AUN Actual Quality Assessment)を受審し認可を取得することを目指している。

3.1.3 学生・教職員

(教職員の採用)

教員の採用はそれぞれの学部にゆだねられているが、なるべく海外の大学で学位を取得した教員を採用している。タイ人教員に関しては授業を英語で行うことができ、適切なアカデミックバックグラウンドを持った教員をリクルートすることは難しくない。本学は研究にも力を入れているため、これに魅力を感じる教員は多い。

外国人教員のリクルートは非常に難しい。科学技術分野の外国人教員の求める給与を支払うことが難しい。また、大学全体の研究力向上のために、授業のみを担当する教員ではなく研究を行える人材を採用したい。

(学生のリクルート及び選抜)

本学は科学技術分野の教育に秀でており、インターナショナルプログラムでは英語力も向上できるためタイ人学生に人気だ。

外国人留学生については、科学技術を学ぶためにタイの大学を選ぶ者は少ないだろう。しかし最近では、東南アジアの国で学生獲得のためのプロモーションを行っており、今年はミャンマーを訪問した。また、国内外の中等教育課程の学生のためのサマーキャンプを開催しており、1か月間本学で研究を体験できる。これに参加した学生のうち、成績優秀な高校生には本学の入学資格が与えられる。

3.1.4 大学の国際化への影響

教室に外国人留学生が一人いれば、教員も学生もそこでは英語を使わなければならないが、学生は留学生から言語だけでなく彼らの文化も学ぶことができる。留学生がいることは大学にとって大きなメリットだ。

3.1.5 課題

優秀な学生を獲得することが課題だ。少子化のため学生数が減っていることに加え、最近の学生は科学技術専攻を敬遠する傾向にある。総合大学で幅広い友人を作りたいと思う学生も多い。また、タイにはレベルの高いインターナショナルスクールが数多くあるが、これらの学校は、学生を海外の大学やタイの中でも有名なチュラロンコン大学やマヒドン大学へ進学させたいと思っている。

優秀な学生の獲得のためには、国際的にも本学の知名度を高める必要がある。質の高い研究を行うことは国際的知名度を高める要因の一つである。また、インターナショナルプログラムの学生には海外の大学院へ進学し本学の知名度を上げてほしい。学生の多くは中流家庭出身者が多く、学部卒業後に大学院に進学したいと希望する学生はそれほど多くない。本学の教育内容は民間企業の求める資質にフィットしているため本学の学生を雇いたいと思う企業が多いことも一因だろう。大学の知名度を高めるためには強い同窓会の力も必要だ。

もう一つの課題は、大学関係者全てにインターナショナルプログラムが大学全体にとって価値があることを共通認識させることである。教員の中にもなぜ英語で授業を行わなければならないのかとインターナショナルプログラムに反対するものがあるが、グローバル化する世界の中で、多かれ早かれ、大学は国際化せざるを得ない。

インターナショナルプログラムは、多くの大学で大学の資金獲得の手段として活用されているが、本学は真に国際化のために活用したいと考えている。

3.2 コンケン大学インターナショナルカレッジ

コンケン大学はタイ東北部を代表する総合大学で、同カレッジはタイ東北部、メコン圏、ASEAN 諸国の国際的な教育ハブとなり、学生に国際社会で通用する知識を身につけるための教育を行うことを使命とし 2007 年に設立された⁶⁹。

インターナショナルカレッジ学部長の Prof. Dr. La-orsri Sanoamuang にインタビューを行った (2014 年 11 月 13 日)。

3.2.1 組織

(インターナショナルプログラム設立の目的)

外国人教員数・外国人学生数を増やし大学ランキングを上げるため。そのために、大学本体よりも外国人教員や学生採用制度において柔軟な規則をもつ組織が必要だったため。

(運営組織概要)

コンケン大学は国立大学なので様々な規程に従わなければならないが、インターナショナルカレッジは独立法人のため、国立大学よりも自由裁量の部分が大きく、内部の規程に基づき教職員

⁶⁹ Khon Kaen University International College, *KKUIC Annual Report 2013*

の採用などを含むすべての運営を行うことができる。予算は大学本体から配分される 6,000 万バーツとカレッジの授業料で運営されている。授業料は大学本体の 4 倍。

3.2.2 教育

(教育の質)

教育の質を高めるために優秀なタイ人・外国人教員の採用に努めているほか、教員に対して研究に力を入れるよう求めている。本カレッジは教員に対して研究や国際会議への参加を奨励するために様々なインセンティブを設けており、年間 5 万バーツの研究費を支給しているほか、大学本体の提供する博士号取得プログラム（1 年間に 50 万バーツ×2 年間支給）があり、カレッジの教員もこれに応募することができる。

3.2.3 学生・教職員

(学生のリクルート及び選抜)

カレッジの知名度が高いため宣伝せずとも学生が集まってくる。タイ国内のインターナショナルスクールから進学する学生も多い。ASEAN 諸国を訪問し留学生獲得のための広報活動を行っている。申請時に英語力が十分でない学生に対しては、アカデミックイングリッシュ準備課程に参加させ、必要な基準を満たしてから入学させる⁷⁰。

(教職員の採用)

優秀な人材を集めるために本カレッジの教員の給与は他学部よりも高く設定している。教員 27 名のうちの 3 分の 2 が外国人教員。博士号取得者が望ましいが、現在は修士号取得者のほうが多い。外国人教員の国籍は欧米、中国、インド等。外国人教員の多くは、海外の大学教員退職者か、若い人の中にはタイでビジネスをし、その傍ら教員をしている人も多い。

タイ人教員の多くは外国の大学院で学位を取得しているため、英語での授業に問題ない。事務職員については、給与を他学部の 1.8 倍に設定し英語の流暢な人材を採用している。

3.2.4 大学の国際化への影響

カレッジのスタッフは大学で国際会議などが行われる際に通訳として支援しており、他学部から国際業務や英語業務を支援するよう依頼されることもある。

⁷⁰ 同カレッジの入学に必要な英語力は TOFELibt 61。参考：Khon Kaen University International College, Thai Student Admission, <<http://www.ic.kku.ac.th/?option=List&type=9&id=69&to=Thai%20Student%20Admission>>(2015 年 2 月 4 日アクセス)

3.2.5 課題

外国人教員の中には自国で教員ポストを得られないためにタイの大学に来る者もあり、教員としてのやる気やスキルに欠ける者、研究に力を入れない者もあり問題だと考えている。

3.3 タマサート大学政治学部国際政治学科

政治学部国際政治学科は 2009 年に学士課程、その 4 年後に修士課程が設置され、現在は学士（政治学）と修士（政治学）の一環コースとなっている。

国際政治学科のファカルティメンバーの一人である Dr. Siriporn Wajjwalku にメールにてインタビューを行った（2015 年 1 月 29 日）。

3.3.1 組織

（設立の目的）

タイにおけるインターナショナルプログラム設立は、1990 年代に社会からの需要が大きくなったことが背景にある。特に 1997 年の経済危機以降子供を海外留学させることが経済的に難しくなった家庭が増え、その需要がますます増えた。

国際政治学科は、タイにおいて学部レベルで国際関係学を学ぶことのできる初のプログラムとして設置された。

3.3.2 教育

（教育の内容と目的）

国際政治学科ではシンガポールや日本、イギリス、オーストラリアの大学で行われている政治学の授業と似た教育を行っている。主に、人権や国際開発、紛争解決、トランスナショナリズムなどの世界の抱える課題や議論点を授業のテーマとしている。

タイ語コースでは、「政治学」、「国際関係学」、「公共政策」の専攻分野があり、タイの伝統的な国際関係論の授業が行われている。具体的には、タイの外交政策、主要国及び近隣諸国の外交政策とその背景がテーマとして設定されている。タイ語プログラムは、卒業生をタイの外務省に送ることを目的としている。

政治学部では、国際機関や海外のタイ大使館でのインターンシップの機会が設けられており、両コースの学生が応募できるが、タイ語コースの学生は英語力が十分でないため、国際機関でインターンシップができないことが多い。交換留学制度も両コースの学生に門戸が開かれているが、インターナショナルプログラムの学生のほうがより多くの機会がある。

国際政治学科の学生の多くは、卒業後に海外留学するものが多い。キャリアとしては、国際機関や国際的な NGO で働く学生もいる。また、タイの外務省の試験合格者も多い。

学士課程と修士課程の一貫コースであり、学生は大学院へ進学することが想定されている。し

かし進学のためには審査があり、自動的に進学できるわけではない。修士課程進学を望まなければ3年半で学士課程を卒業でき、通常の学士課程よりも短い期間で学位を取得できるため、これも国際政治学科の魅力の一つだ。

(教育の質)

教育の質を保ち向上させるためには、学部の執行部や役員が明確な教育理念を設定することがとても重要だ。これに加えて、各教員が、教育の内容を高いスタンダードに設定することと、学生の質もプログラムの成功とクラスの質の向上において重要だ。

各学部に所属する教員が授業の内容や連続性、ティーチングスケジュールを把握しているため、運営効率がよく、教育の質も保証できる。常勤の教員がいなければプログラムの運営も教育の質保証も難しくなるだろう。

教育の質保証の実際的な取り組みとしては、カリキュラムの見直しが5年ごとに実施されているほか、それぞれのコースの評価が毎学期ごとに行われ、授業を担当する教員はその評価内容がフィードバックされ、授業の改善に役立てられている。

3.3.3 学生・教職員

(教職員の構成)

タマサート大学の規則で、インターナショナルプログラムを設置する学部は、学部教員の10%が外国人教員でなければならないと定められている。政治学部の場合は、38から40の教員ポストがあるため、最低4名の外国人教員がいなければならない。また、学士課程では、タイ語コースもインターナショナルプログラムも、5名のフルタイムのタイ人教員がプログラムの運営や教育内容を管轄しなければならないと定められている。

英語で教育を行うことができ、適切なアカデミックバックグラウンドをもったタイ人および外国人教員をリクルートすることは難しいが、質を高く保つためには必須である。

(学生の構成)

学部でも大学院でもおおむね、少なくとも5%の外国人留学生を確保したいと考えている。学部については、毎年5%以上の外国人留学生がいるが、彼らの90%は交換留学生であり、最高でも1年間だけ所属する。大学院では3から5%の外国人留学生がおり、彼らの90%はフルタイムの学生で、国際政治学科で学位を取得する。

3.3.4 大学の国際化への影響

国際政治学科は大学にとってタイで最初に学部と大学院を統合し国際関係学に特化した教育を行う唯一のプログラムとして価値がある。

3.3.5 課題

プログラムの質の維持と学生の質の維持が最も大きな課題である。

3.4 チュラロンコン大学コミュニケーションアーツ学部コミュニケーションマネジメント学科

調査はコミュニケーションアーツ学部が 2004 年に国際プログラム⁷¹の学科として設立したコミュニケーションマネジメント学科を対象に行った。同学部は広告やマスコミ、ジャーナリズムなどの様々な形態のコミュニケーションについて学ぶ学部であり、2014 年分野別 QS 世界大学ランキングで 151 から 200 位の間に位置づけられ、タイの大学の社会科学分野で最も高い国際的評価を得ている⁷¹。

同学科で講義を担当する副科長の Shawhong SER 助教、Jessada Salathong 講師、中井仙丈講師にインタビューを行った（2015 年 1 月 30 日）。

3.4.1 組織

（設立の目的）

タイにはバイリンガルな子供を育てるために幼稚園から高校まで国際スクールがある。ここで教育を受けたタイ人や両親がタイで働いている外国籍の子供たちの進学先として国際プログラムが盛んに実施されている一面もある。

また、タイはこれまで、海外に留学し知識や技術を得て国内にそれをもち帰るといった知識の輸入型だったが、海外から人材を受け入れてそこでタイ人が学ぶ仕組みを作ろうという狙いもあるのではないかと推察される。

（運営組織概要）

チュラロンコン大学は各学部が予算、規則などのガバナンスにおいて非常に強い独立性を保っているため、それぞれの学部が独自の基準に基づいて学生の入学基準や教育の質保証を行いたいと考えている。そのため、学部横断的な国際カレッジではなく、各学部がプログラムを運営する制度を採用している。また、チュラロンコン大学が規模の大きい大学であるため、各学部が独自にプログラムを運営できる資金や人員などのリソースが十分にあったことも大きな要因である。

この制度の利点は、国際プログラム所属の学生とタイ語コース所属の学生が一つの学部⁷²に混在し相互交流が進むことだ。

⁷¹ QS Quacquarelli Symonds Limited, “QS World University Rankings by Subject 2014 - Communication & Media Studies” (2015)<<http://www.topuniversities.com/university-rankings/university-subject-rankings/2014/communication-media-studies>>

3.4.2 教育

(教育の目的)

タイ語で提供されるプログラムは学生に卒業論文を課し研究志向が強いのに対して、インターナショナルプログラムは実社会で役立つ実用的な知識や技能を身に着けるための教育を行っている。学生に卒業論文は課されておらず、プログラムの一環として企業へのインターンシップ参加を課しているほか、海外留学も推奨している。

(教育の質)

5年ごとにプログラムの開講コースが適切であるか、時代に合っているか等の見直しが学科内部の委員会により行われる。各講義も毎年学生により評価が行われている。

3.4.3 学生・教職員

(学生のリクルート)

特に海外でプロモーション活動などは行っていない。タイ国内ではインターナショナルスクールに出向いて説明会を行ったり、インターナショナルプログラムが集まるフェアでブース出展したりして広報を行っている。

(学生の選抜)

インターナショナルプログラムに入学を希望する学生は、学科の実施する英語、筆記試験及び面接のみで合否が決まる。このため、多くの科目を受験して選抜されたタイ語コースの学生と比較すると学業面でのパフォーマンスが低い面がある。より優秀な学生を選抜するために、英語の成績、筆記試験、面接の3項目をそれぞれどのくらいの比率で考慮するかという率を毎年見直している。

(教職員の採用)

教員の採用条件は博士号保持者あるいは10年以上の職業経験を条件としている。タイ人も外国人教員も英語で講義を行うことのできる教員のキャンディデイトは数多くいるが、プログラムに必要なアカデミックバックグラウンドを満たす人材を探すことが非常に難しい。

3.4.4 大学の国際化への影響

インターナショナルプログラムは通常のコースよりも学費が高いため、大学にとって重要な収入源となっている。また、学生や教員が多国籍化するため、大学が国際化しているというプレゼンスを示すことができる。

3.4.5 課題

教育の質を向上させるためには、教員が研究にもっと力を入れなければならない。これまで、タイの大学教員は研究よりも教育に力を入れるものが多かった。しかし、タイ教育省は国際化の中で他国の大学と競合していくためには研究に力を入れなければならないと考えるようになった。こうした背景のもと、インターナショナルプログラムも研究にも力を入れることが求められている。そのため当学科の教員は研究担当と教育担当に採用時から役割が定められている。

また、今後 ASEAN 経済統合が進み、ASEAN 域内の大学間で単位互換や学生交流が進むが、タイの大学のインターナショナルプログラムがマレーシアやシンガポールなどと競合し、他国の留学生を呼び込むプラットフォームとなりえるためには、教育の質をさらに向上させなければならない。タイの大学が強みを持つ研究分野でのプログラムに力を入れるなど工夫が必要だ。

3.5 マヒドン大学インターナショナルカレッジ

インターナショナルカレッジ国際担当副学部長 Chanuantong Tanasugarn 助教授、Anchisa Kanjanarujivut 国際担当職員、Worada Aprirat 短期交流プログラム担当職員にインタビューを行った（2014年12月11日）。

3.5.1 組織

（設立の目的）

インターナショナルカレッジ設立当時（1986年）のマヒドン大学学長がアメリカの有力大学がリベラルアーツ教育に非常に力を入れていることに影響を受け、タイの大学においてもクリティカルシンキングや幅広い教養を身に着けた国際社会で通用する人材育成を行うために同カレッジを設立した。

（運営組織概要）

カレッジという組織の利点は、大学本体から独立した組織として、大学の規程とのコンプライアンスを守りながらも独自の基準、規程に則り教職員の採用、給与設定、学生の受け入れを行うことができ、社会変化に応じて柔軟に規程の改定が可能なことである。

インターナショナルカレッジでは学生のみならず教員も職員も多国籍な環境のため、考え方や文化の違いから衝突が起きないように努力をしている。カレッジの運営面で難しいのはこの点であるが、学生だけでなく教職員も含むカレッジ全体で国際的な環境を作ることが本当の国際化だと考えている。

3.5.2 教育

(教育の目的)

リベラルアーツとして文理両方の幅広い教養を身に着け、卒業後に自身の学んだことを社会に還元できる人材を育成している。マヒドン大学では医学部、情報工学部、理学部がそれぞれのインターナショナルプログラムを提供しているが、インターナショナルカレッジでも理系分野も含む20のプログラム(学士課程)を提供している。両コースの違いは、前者が専門教育を目的としているのに対して、後者はリベラルアーツの習得を目的としていることである。

学生の中には学んだことを活かして在学中に起業する学生もいる。また、教員は学生のインターンシップもサポートしている。卒業後は、多くの学生が家族の経営する会社を継いだり起業している。海外の大学院へ進学するものも多い。

3.5.3 学生・教職員

(学生のリクルート及び選抜)

学力、英語力ともに高い入学条件を学生に求めている。これを満たせなかった学生のために集中して英語と数学の教育を行う準備課程⁷²を設置している。

(教員の採用)

外国人教員に対して母国と同水準の給与を提供できないが、リクルートは特に苦勞していない。マヒドン大学の海外提携大学のネットワークや、タイの文化や風土にひかれて応募する者もいる。基本的に外国人教員は1年契約だが、研究や教育面でのパフォーマンスを評価し契約を更新する。更新限度はない。

タイ人教員の多くは海外で教育を受けたり学位を取得した者がほとんどのため、英語で授業を行うことに問題はない。カレッジの高い評価を聞き、海外経験を持つ人材が自然と集まってくる。

(事務職員)

教員だけでなく事務職員も国籍を問わず採用し国際的な環境を作っている。さらに、インターナショナルカレッジに限らずマヒドン大学の事務職員は毎年 TOEIC を受け、一定の点数を取得できなかったものは業務時間中に行われる英語研修に出席しなければならない。業務の一環として事務職員も業務改善や運営に関する調査研究を行うことも課されている。これは、マヒドン大学が研究大学として事務職員も研究に貢献することが大切であり、また、大学の国際化に応じて事務の仕組みを絶えず開発していく必要があると考えているためである。

⁷²英語、数学準備コース (The Preparation Center for Languages and Mathematics)、MUIC へ入学を希望する学生が必要な語学力と数学の力を身につけるために設置された入学準備コース。このコースで学んだ後に MUIC の入学試験を受け合格すれば入学することができる。同コースには、タイ、中国、ベトナム、日本、バングラデシュ、ミャンマー、韓国等様々な国籍の学生が在籍している。(参考: Mahidol University International College, (2013) 'THE PREPARATION CENTER FOR LANGUAGES AND MATHEMATICS', <http://www.muic.mahidol.ac.th/eng/?page_id=346> (2015年1月11日アクセス))

3.5.4 大学の国際化への影響

本カレッジには外国人教員や留学生が数多く所属しているため、結果として大学の国際化指数を上げ大学ランキングで高い評価を得ることに貢献している。また、カレッジは大学にとって組織の国際化の良いモデルとなっている。

3.5.5 課題

これまでリベラルアーツ教育担当として教員を採用してきたが、彼らにも研究を行うことが求められるようになってきた。背景には、マヒドン大学が研究大学という自覚のもと、インターナショナルカレッジの教員にも研究へ貢献することを求めるようになったことがある。教育担当として採用された教員にとって、急に研究を行うことは難しいため、当カレッジでは教員が教育または研究のどちらかのキャリアトラックを選択できる制度を採用している。

付録 4: タイのインターナショナルプログラムで学ぶ日本人留学生へのインタビュー

回答者

小森健太さん（カセサート大学農学部熱帯農学科留学、鹿児島大学4年）

張田あずささん（マヒドン大学インターナショナルカレッジ経営学科留学、九州大学修士1年）

楊木萌さん（カセサート大学農学部熱帯農学科留学、京都大学3年）

4.1 質問：どのような授業を履修したか。

小森：留学生は全てのインターナショナルプログラムの授業を受講できるため、所属先の熱帯農学科以外の学科の授業も積極的に受講した。具体的には、「熱帯農学入門」、「園芸学」、「国際経済学」、「農業経済」、「タイ語」を履修した。日本の大学で受講した授業に比べてフィールドワークが多く、実際に熱帯系の植物や果物を目の前で見ながら説明を受けることができた。

タイ人学生のほうが日本人学生よりも積極的に質問をする。他の国から来た留学生と一緒に授業を受け、彼らの意見を聞けることも面白かった。授業の内容は簡単だが、英語で学ぶため日本の授業よりも少し難しく感じた。

プレゼンテーションの機会も日本の大学よりも多く、英語で考えをまとめて準備し、人前で発表するととてもいい練習になった。発表後に学生から質問も多くでるため、質疑応答も鍛えられた。

楊木：私も所属学科の熱帯農学に関する授業に加えて、「昆虫学」や「バイオテクノロジー」を受講している。

張田：マヒドン大学でも所属学科以外の授業も受講できる。1学期に4コマ授業を取れるが、「タイ語」と「英語」を通年で受講しているほか、前学期は「タイ料理」と「世界史」、今学期は「教育心理学」と「東南アジアの経済問題」を受講している。

東南アジアの視点で学ぶことができる点が面白い。例えば世界史も東南アジアに位置する国なので、植民地の歴史に重点をおいていたり、東南アジアの女性、という観点でのジェンダー論の授業などが開講されている。

しかし、授業の内容は日本の高校の資料集で十分理解できるほどの内容で、論文にできるような新しい専門的な知識を得ることはできなかった。一般教養のための授業なのだと思う。

毎週末、授業で学んだテーマについて英語でエッセイを書き提出し、先生からフィードバックを受ける。タイ人学生も英語ネイティブではないので、英語以外の科目でも英語力を強化することが意識されているようだ。

4.2 質問：教員・学生について

小森：カセサート大学は、クラスのほとんどがタイ人学生。正規の留学生は、インド、ドイツ、フランス、中国、日本から各学年に1人ずつくらい。AIMSプログラムなどで1年以下の短期プログラムの学生が団体で参加する時期もあり、その時は教室の中のタイ人と日本人の比率が2対1くらいになった。

楊木：タイ人の先生の英語力にはばらつきがあった。

張田：マヒドン大学インターナショナルカレッジもクラスの中でタイ人30名に対して留学生が2、3名くらいの比率。留学生のほとんどがアメリカ人。彼らは交換留学などのプログラムではなく、個人でカレッジに直接申し込み、1 Semester在籍し、単位を取得して自分の大学に帰っている。

教員は、タイ人よりも他の国籍の教員のほうが多いが、タイ人の先生も含めて英語力が高いため、講義を受けることが英語力の向上につながる。

4.3 質問：タイのインターナショナルプログラムで学ぶ魅力は何か？

小森：英語力を上げるために海外留学したが、タイは欧米への留学と比較して安い授業料や生活費で英語を学ぶことができる。また、タイ人はフレンドリーで英語ネイティブではないため、彼らとはおじけずに英語でコミュニケーションをとることができた。英語以外にもタイ語を学べることもよい。

張田：欧米へ留学するよりもずっと安価に英語を学べるのが大きな利点だと思う。カレッジの方針も、学部時代に海外留学よりも安い授業料で国内で英語を鍛え、欧米の大学院に進学する、というステップをタイ人学生に対して魅力として売り出しているようだ。

4.4 質問：インターナショナルプログラムでどのような学習成果があったか。

楊木：熱帯についての知識を得ることができた。どの授業でも「熱帯」が大きなテーマとなっている。

また、周りの言葉が何もわからない、読めない、話せない、英語も通じない中で過ごしたことは新しい経験だった。日本に一時帰国したときに、目を見て話すようになったね、それから人の話を聞くようになったねと家族に言われたが、言葉の壁がある中で過ごすうちに、相手の目を見て自分が聞いていることをアピールし、態度でも聞いていることを示すことができるようになったようだ。

小森：留学したばかりのころは、食堂でタイ語で注文するのもジェスチャーを駆使しなければならなかった。言葉の壁がある中で、タイ人やほかの国から来た留学生とコミュニケーションをとるために、音楽やダンスなどいろいろな手段を試みた。そうした交流を通して、友人ができ深い絆を築くことができた。また、英語力が向上してタイで出会った様々な国籍の友人たちと深い話をすることができ、自分の将来の方向性を考えるきっかけとなった。

張田：東南アジアは宗教や歴史的背景、経済力の面で多様な国々が集まっているため、これらをテーマとする授業が多く、知識だけでなく東南アジアの視点で学ぶことができた。インターナショナルプログラムの授業を日本の大学と比較すると、得られる知識は日本の大学のほうが多くて深いだろう。しかし、東南アジアの視点での学びや、留学生としての生活、また出会える人の幅は、ここに来ないと得られなかったもの。留学の目標が学問の知識習得だけでないならば、タイの大学に留学することに意味があると思う。

参考文献

ASEAN University Network, AUN-QA Actual Quality Assessment at Program Level, <<http://www.aunsec.org/programmelevel.php>> (2月3日アクセス)

Commission on Higher Education, Thailand, *Study in Thailand 2006-2007* (タイ高等教育局より入手)

Chulalongcorn University, Communication Management, <<http://www.inter.comarts.chula.ac.th/page/>> (2015年1月11日アクセス)

Khon Kaen University International College, *KKUIC Annual Report 2013*

Khon Kaen University International College, Thai Student Admission, <<http://www.ic.kku.ac.th/?option=List&type=9&id=69&to=Thai%20Student%20Admission&>> (2015年2月4日アクセス)

King Mongkut's University of Technology Thonburi, Faculty of Engineering, Tuition fee, <<http://www.eng.kmutt.ac.th/en/node/74>> (2015年2月7日アクセス)

King Mongkut's University of Technology Thonburi, *Strive for Practical Excellence*

Mahidol University International College, Admissions Requirements <http://www.muic.mahidol.ac.th/eng/?page_id=2138> (2015年2月7日アクセス)

Mahidol University International College, (2013) ,The Preparation Center for Languages and Mathematics, <http://www.muic.mahidol.ac.th/eng/?page_id=346> (2015年1月11日アクセス)

Office of Higher Education Commission, Thailand, Overview of Current Thai Higher Education Development, <http://www.inter.mua.go.th/main2/page_detail.php?id=9> (2015年2月12日アクセス)

Office of Higher Education Commission, Thailand, Thai Higher Education: Policy & Issue, <http://www.inter.mua.go.th/main2/page_detail.php?id=9> (2015年2月12日アクセス)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2010* (タイ高等教育局より入手)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2012* <<http://www.inter.mua.go.th/main2/list.php?id=pu02>> (2015年2月4日アクセス)

Office of the Higher Education Commission, Thailand, *Study in Thailand 2013* <<http://www.inter.mua.go.th/main2/list.php?id=pu02>> (2015年2月4日アクセス)

Pichitmarn, Parisa (2015, February 25). A World of Educational Opportunity. *Bangkok Post*, p.12.

QS Quacquarelli Symonds Limited, QS University Rankings: Asia 2014, (2015) <<http://www.topuniversities.com/university-rankings/asian-university-rankings/2014>> (2015年2月4日アクセス)

QS Quacquarelli Symonds Limited, “QS World University Rankings by Subject 2014, Communication & Media Studies” (2015) <<http://www.topuniversities.com/university-rankings/university-subject-rankings/2014/communication-media-studies>>

Sinlarat, Paitoon (2004), “Thai Universities – Past, Present, and Future,” in PhilipG. Altbach and Toru Umakoshi, eds., *Asian Universities: historical perspectives and contemporary challenges*, The Johns Hopkins University Press, pp. 201-219.

九州大学教育国際化推進室 (2014) 「「グローバル 30 総括シンポジウム『国際化で大学は変わったか』報告書」 <http://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/follow-up/data/h26/global30_report.pdf > (2015年1月10日アクセス)

大学評価・学位授与機構評価事業部国際課（2014）「AUN 加盟大学に対するプログラムアセスメントについて」<http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/qa/no17_aun_programassess.pdf>（2015年2月3日アクセス）

日本学術振興会（2013）「AIMS リスト掲載大学（2013年6月13日現在）」<http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/download/11_tenkaih25_aimslist_130613ver.pdf>（2015年2月7日アクセス）

パーソネルコンサルタントマンパワー（タイランド）株式会社（2014）「タイの大学事情」

望月太郎（2011）「大学教育の国際化とインターナショナルプログラムの展望—チュラロンコン大学コミュニケーションアーツ学部の事例から」『KEIO SFC JOURNAL』第11巻第2号

文部科学省（2014）「大学における教育内容等の改革状況について（平成24年度）」<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1353488.htm>（2015年1月10日アクセス）